

2020. 7. 25

畑 啓之

今から2000年前の日本人はどのような住居に住んでいたか

私が住んでいる兵庫県加古川市の東隣に播磨町があり、ここに大中遺跡があります。かつては、ここに250軒ほどの住居があったものと推察されています。

播磨町のホームページより

大中遺跡は、弥生時代後期（約1900年前）から古墳時代初頭（邪馬台国 卑弥呼と同時期）の代表的な遺跡で、長さ500m、幅180mで、約70,000平方メートルの広さがあります。

これまでに全体の20%の面積を調査し、73軒の竪穴住居跡が見つかっています。見つかった住居跡の数から考えると、遺跡内には少なくとも250軒くらいの住居が建てられていたようです。当時、貴重品だった中国製の鏡（内行花文鏡片）が出土しているので、播磨では有力なムラでした。



三内丸山遺跡（青森）がよく知られています。

<https://sannaimaruyama.pref.aomori.jp/about/iseki/>

三内丸山遺跡は、今から約5900年前～4200年前の縄文時代の集落跡で、長期間にわたって定住生活が営まれていました。

この2例を見る限り、三内丸山の青森5900年前から播磨の兵庫2000年前まで、日本人の住む一般住居の形には大きな変化がなかったようです。ただし、現代人の想像による復元家屋ですので、多少は割り引いて考える必要があります。



一方、西洋においては次ページに示すよう、オーストリアでの竪穴住居もありますが、ポーランドでの発展形も見られます。

書籍「西洋住居史 石の文化と木の文化 後藤久（2005）」より

ハルシュタット文化 (Wikipedia)

中央ヨーロッパにおいて青銅器時代後期（紀元前 12 世紀以降）の骨壺墓地文化から発展し、鉄器時代初期（紀元前 8 世紀から紀元前 6 世紀）にかけて主流となった文化。後に中央ヨーロッパのほとんどはラ・テーヌ文化に移行した。

書籍では図 25 は次のように述べられている。

ポーランドのビスクーピン湖村（紀元前 550～前 400 年頃）は、木柵に囲まれた楕円形の中心に杭上住居（湖上住居）がある 7000 平方メートル近い大規模なものであった。囲いの中には無数の杭の上に床を造り、南面した 100 戸以上の丸太の家が規則正しく立ち並び、その 1 戸は 8 メートル× 9 メートル程度で前室と主室の 2 部屋で構成されている。



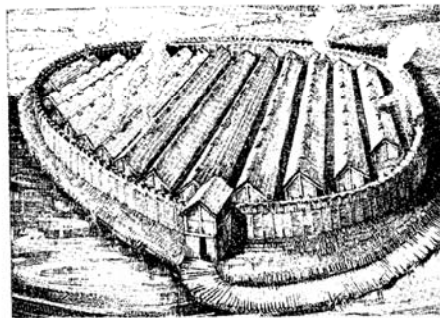
図 17  
ハルシュタット期の竪穴住居（復元）。  
アスバルツ、オーストリア。紀元前六〇〇年。ウイーン近郊のアスバルツに復元されているハルシュタット期の竪穴住居。地面を掘り下げて丸太を組み、地面まで層を葺き下ろしている。



図 25  
防壁で囲まれたビスクーピンの集落（復元）。①平面図。  
②復元図。ポーランド、紀元前一六六〇～前五〇〇年。多くの住居を竪穴式の住居が規則正しく立ち並び、その 1 戸は 8 メートル× 9 メートル程度で前室と主室の 2 部屋で構成されている。



図 19  
ポーチがある北方の家（復元）。①平面図。②外観。モールドルフ・タンフリード、ドイツ。新石器時代。一室住居であるが、要部の壁と屋根が伸び、半戸外の部屋（ポーチ）が出来ている。



れている。全体は木製の柱の外側に粘土を塗り、燃えることを防ぐ効果があった。一住戸単位はすでにドイツにおける湖村の住居でも見られたものと同様、前室と後室からなる。

ヨーロッパでは、場所により、また時代により、住居の在り方の進歩は不均等であったようです。それに対して、日本の変化は全ページに見られるように、非常にゆっくりとしたものであったと感じられます。これは、当時（といっても非常に長期間ですが）の日本が平和で過ごしやすく、自ら変化する必要がなかったためではないでしょうか。

コロナに揺れる、変化せざるを得なくなっている今の日本と比較するのも、ある意味で趣味が悪いかもしれませんが、興味深い時代であったことは間違いがないでしょう。